平成２３年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	２３Ｋ０１	氏　名	佐　生　秀　之
研究主題 —副主題—	望ましい社会観の育成と学力向上 - 小学校段階における特別活動の指導の重要性 -		
所属校	世田谷区立松沢小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	近年の社会状況の変化により、子供たちの生活体験の不足や人間関係の希薄化、生活上の諸問題を話し合って解決していく力の不足など顕著になっており、よりよい人間関係や生活を築く態度を育てることが緊要の課題となっている。 これらの課題を解決してくために、集団生活を基本とする学校教育への期待は大きく、特に、望ましい集団活動を通して、子供たちの人間形成を図る特質をもつ特別活動は大きな役割を担っている。 今年度から、新しい学習指導要領が完全実施となった。各学校では教育目標のよりよい実現に向けて、特別活動と教科、外国語活動との相互の関連を十分に図ることがこれまでにも増して求められている。しかし、新しい教科書の使用に伴う指導者の教科指導への意識の強まりや総授業時数の増加に伴い、特別活動、とりわけ自発的、自治的な活動を特質とする内容での子供たちの活動時間の確保の難しさなどが見られ、特別活動の充実につながっていない現状があることを危惧している。 こうした中、私たちは特別活動の重要性を強く認識し、特別活動の一層の充実により、よりよい人間関係や生活を築く態度を育て、子供たちの資質や能力の育成に十分につなげていかなければならないと考える。
Ⅱ　研究の方法	１　先行事例研究 ①文献研究 「学力」「学習意欲」「人間関係」「集団づくり」「特別活動」等をキーワードに、現代における学力問題とその時代的背景や学力の向上と子供の社会力との関連について、文献研究により概観する。 ②研究会への積極的な参加 特別活動の研究に関する研究会に積極的に参加し、事例研究を行うとともに、積極的に自身の実践の提案を行った。参加した研究会は以下の通り。 全国道徳特別活動研究会　全国特別活動研究会　日本特別活動学会　東京都小学校特別活動研究会　多摩地区特別活動連絡協議会　世田谷区小学校教育研究会特別活動部　多摩市小学校教育研究会特別活動部等。 ２　学校訪問 ・文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　杉田洋先生に同行させていただき、特別活動の研究を行っている学校の校内研究に参加させていただいたり、個別にお願いしたりして、授業参観させていただいた。 主な訪問先は以下の通り。 新宿区立江戸川小学校　目黒区立原町小学校　目黒区立田道小学校　多摩市立南鶴巻小学校　世田谷区立山野小学校　府中市立住吉小学校　練馬区立豊玉東小学校　八王子市立館小中学校　江戸川区立平井南小学校等。 ３　自身の実践のリフレクション 全国道徳特別活動研究会第３３回全国研究大会での全体提案者であることをきっかけに自身の特別活動における実践の振り返りを行った。

Ⅲ　研究の結果	１　日本の子供たちに付けさせたい学力とは 　平成８年７月中央教育審議会『２１世紀を展望した我が国の教育の在り方について』には、我が国の教育において子供たちに身に付けさせたい力について明確に述べている。ここでは省略するが、この答申からも分かる通り、我が国の教育の向かう方向は「生きる力」の育成であると言える。もちろん、そこにはＰＩＳＡで問われるような力も含まれているので、社会や学校、教師や親はここで明らかになった課題については、改善するようそれぞれの立場で努力していくのは当然である。しかし、国際学力テスト等で順位が下がったことが子供たちの「学力低下」と判断することができるのだろうか。ここ数十年、我が国の教育は、子供たちに「生きる力」を付けさせようとしてきた。それは一言で「知・徳・体のバランス」であると言えるであろう。日本の子供たちは、１週間３０時間弱の授業の中で、各教科の学習と道徳や特別活動、総合的な学習の時間にまで学びの幅を広げ、教師も多彩な力を発揮しバランスよく学べるよう努力している。一方、他国においては、道徳の時間や特別活動の時間がなかったり、日本のような行事を行わなかったりする国もあるという。このように、国によって学校教育の方針や重視している学力には違いがあることがわかる。このことを元文部省初等中等教育局視学官・中野重人氏は「学校教育の基礎基本は、その国民性や文化的背景、また、教育の目的等によって、古今東西にあって、違いがあることを指摘しておきたい。それは、文化の違いであるといってよいのである」と言われ、ＰＩＳＡなどの国際学力テストの結果が、その国の教育力や子供の学力の結果であると捉えるべきではないと指摘している。 ２　大切なのは「知」「徳」「体」のバランス 　大阪大学の志水宏吉氏は自身の著書の中で、学力の構成について“学力の樹”を用いて表現している。第一にペーパーテストによって容易に点数化できる「知識・理解」の部分を「Ａ学力」、次にペーパーテストでは測りにくい「思考力・判断力」「論理構成力」や「表現力」などを「Ｂ学力」、そして、第三に点数化はそもそもできないが、Ａ学力やＢ学力の向上のために必要な要素である「関心・意欲・態度」といったものを「Ｃ学力」と名付けた。これら３つの学力は、それぞれが関連し合っていて、学力を構成する上でどれかが欠けてもならないと言う。そして、文旦という大きなみかんを生産している人の話から、特に「意欲（Ｃ学力）」の育成が大切であると言う。 ３　意欲はどこに向かうべきか 　どんなに子供たちが意欲にあふれ、夢中になって学問に挑戦し、力を付けたとしても、その動機が不純で破壊的であったり、反社会的で他人を傷つけたりするようなことであった場合、それは、意欲的とはいえ、とても不幸な結果を生む。意欲というのは、行動を加速させる分、向かうべき方向を取り違えると大変なことになる。 　子供に望ましい社会観を育成する―これこそ、教育にとって最も重要なこととも言えるのではないだろうか。
Ⅳ　考察	学校教育の場において、子供たちにこのような豊かな人間性や社会性を育み、自律的に生活できるよう指導せしめることを目指した教育活動は「特別活動」であるといえよう。学習指導要領には、その目標を「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」（下線は筆者）としている。学校教育の中における特別活動の教育的意義についてまとめると、教科の指導が、子供達の知識技能や科学的思考力の育成をねらっているのに対し、特別活動は、望ましい集団活動を通して、社会の中で生きる人としての能力、態度、習慣を形成することをねらいとしている。本論では、子供たちが特別活動での経験を自分の成長に結び付けて考え、将来に向けてさらに成長していこうとする意欲にあふれている様子を述べている。特活を通じて培われる力は、人としてのあらゆるいとなみを支えるものであり、生き抜いていく力の根源である。このような力を獲得した子供たちは、自分の将来に希望を見いだし、多少の困難にも負けず、力強く人生を開いていってくれると確信している。